みんなで

のりこえよう通信

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　校長室から

令和　2　年　4月　28日　　NO.12

おじいちゃんと呼ばれて

　確か19歳の秋のことだったと思います。

　髭もそらず寝癖も直さず、悶々と生活をしていた頃、ふと散歩に出かけた先で、子どもたちがボ－ル遊びをしていました。そのボールがこちらに転がってきたので、拾い上げて渡そうとしたとき、その子どもの一人が言い放ったのです。「おっちゃん、ボ－ル取って」。「おっちゃん」と呼ばれた最初でした。「お兄さんやろ」と言いたくなるのをこらえ、思わず拾い上げたボールをヨソへ放り投げようかと思いましたが、これもぐっとこらえました。

　先日、会議などを外出なしで自宅にいながらできないかと悪戦苦闘していると、大学生の娘Hが「なんとかっていうアプリがあるで」とか。昔のプロレスラ－の「アッパ－」とかは、わかっても「アプリってなんや」とは聞かずに、スマホをじっと見つめていると、高校生の娘Nが、「貸してみ」と私のスマホ取り上げてそのアプリをスマホに入れてくれました。

　ここからパスワ－ドやメ－ルが届いているとか、ややこしい手続きばかりで、うんざりして「ああああ」となっていると、高校生の娘Jがやってきて、「貸してみ」と。鼻歌交じりに、スマホをいじってチョイチョイ。次に渡された時には、なぜか私の顔がスマホに映っている。しばらくすると二階にいる中学生の娘Mたちの映像や話し声が。

　遠隔で顔を見ながら会話ができたのです。

　嬉しくって次の日、若い先生に「こんなんできてん」というと、不思議そうな顔をして言いました。

　「昔から高校生のあいだでは、普通にやってますよ」。

　二月の最初のころだったでしょうか。

　幼稚園で園児の遊んでいるところを見ているときです。

　園児の一人が指さして言いました。

　「わたしのおじいちゃん、そっくり」と。

　素直に若い人のすることを認めていこうと思ったのでした。